



竹人形一筋47年、ふるさとに息づく伝統の技法

名工 阿波 鶴羽

真つすぐだった細い竹が
電気ごとの熱でくの字に曲がり
動きのある足へと姿を変える
余計な造作を削ぎ落とし
極限まで減らしたパーツで踊り子を表現する
阿波踊り竹人形
伝統工芸の灯を守り続ける匠が
1本の竹に余すところなく命を吹き込んでいく

阿波の名工
鶴羽 博昭さん（竹人形師）

Profile
昭和4年12月25日生まれ、85歳。新野町在住。
阿波踊り竹人形の草分け、故・小川練一さんに師
事し、独自の「袖付き竹人形」を考案するなど、
半世紀近くにわたり人形づくりに打ちこんでいる。
長年の功績が認められ平成26年11月21日、徳島
県卓越技能者（阿波の名工）の表彰を受ける。

題字 野村千寿子さん（宝田町）



踊る阿呆を再現する

揺れ動く群舞が街を彩る、阿南の夏を思い起こす。街中にあふれるぞめきのリズムが、祭りの高揚感をいつそう高める。踊り子たちのはじける笑顔。鳴り物たちも連の持ち味を存分に発揮し、踊りを盛り上げる。

そんな阿波踊りの瞬間を小さな人形でさらりと表現した阿波踊り竹人形は、阿波土産の中でも人気が高い。身の丈わずか5センチほどの竹細工。白くつややかで、竹の直線と曲線、枝や節などの特長という3つの組み合わせで、阿波踊りの世界を表現する。衣装などの色彩はないが、思い思いのポーズで踊る阿呆を再現している。



すらりと伸びた足、しなやかな腕の曲線美が特徴の女踊り。揺らめく浴衣の袖を絶妙な角度で表現し、やさしく尖った手のはびやかに天を指す。大胆に曲がった男踊りの足は、阿波踊り独特の足さばきそのもの。鳴り物を抱え、それらが相まって言うに言われない味わいを醸し出している。

余計な造作を削ぎ落とし、極限まで減らしたパーツで踊り子を表現する。それらを一枚の台に乗せて連を作り上げ、阿波踊りのエネルギーを一場面を切り取る。こんなにも素朴な人形の何が、この透明感と躍動感を生み出すのだろうか。

名工の誕生

昨年11月21日、竹人形師の鶴羽博昭さん（85歳・新野町）が、「徳島県卓越技能者（阿波の名工）」の表彰を受けた。卓越技能者とは、極めて卓越した技能等を有する人という。昭和57年に制度が創設されて以来、これまでに97人の名工が誕生している。

鶴羽さんは、故・小川練一さん（新野町）から阿波踊り竹人形の製法を受け継ぎ、創意工夫で独自の「袖付き竹人形」を考案するなど、たぐいまれなる感性と技能で業界の発展、後進の育成に力を傾注してきた。長年の功績とたゆまぬ技の研鑽が認められ、阿南市民として初めての快挙を成し遂げた。

つていました。退院して実家に帰ると、地元の八木寿夫さんや島村利治さんなどを弟子に迎え、製法を伝授。竹人形の需要の高まりとともに人手不足になり、当時親しくしていた私に声がかかりました。

小川さん宅に通い続けるうちに、繊細な竹細工の妙にひかれていく。部品の竹材を磨くといった雑務をこなしながら、見よう見まねで竹人形の作り方を覚えた。

「これは面白い、わしにもできるかも。一緒に作らせてもらおうわ」

鶴羽さんは、それまで営んできた養鶏業をやめ、竹細工で身を立てる道を選ぶ。

トラックを所有していた鶴羽さんは、販路の開拓に奔走した。自分たちが作った竹人形を段ボールに詰め、小川さんと一緒に徳島市や鳴門市の卸問屋を回った。時には淡路や道後にも足を

伸ばし、阿波土産の魅力を売り込んだ。「エネルギーシユな阿波踊りをテーマにしたことや、日本人好みの竹を素材に用いたのが受けたと思う。県外では面白いほど売れたな」

「もつと持つてきてよ」。卸問屋の言葉が背中を押す。遠距離もなんのそのハンドルを握りしめる手にもいつそう力が入った。

「袖付き竹人形」の誕生

阿波踊り竹人形にはもう一つ、小型の「連立ち」と呼ばれるものがあつた。戦後間もない頃、初代竹仙こと故・藤田義治さん（鳴門市）が考案したものだ。1950年（昭和25年）、阿波土産公募美術工芸部門に「阿波踊り竹人形」として出品し、銀賞の県知事賞に輝いたことで世に知られた。1960年代



自宅の工房で阿波踊り竹人形を製作する小川練一さんと妻・カズ子さん。越前竹人形にヒントを得て考案された。（昭和43年頃）

竹人形との出会い

鶴羽さんは、1929年（昭和4年）に那賀郡羽ノ浦町で生まれる。16歳の時、神戸で終戦を迎えた鶴羽さんは復員後、叔母の嫁ぎ先である鶴羽家を継ぐために養子（旧姓「後藤」として鶴羽家に入り、農業や山仕事に勤しんだ。鶴羽さんが竹人形づくりを始めたのは38歳の頃から。徳島竹人形の先駆者である小川さんに手伝いを頼まれたのがきっかけだ。

「小川さんは、病氣療養中に病室でも作れる1人立ちの阿波踊り竹人形を考案し、闘病仲間とともに竹人形を作

後半には県内各地で講習会が行われ、多くの竹人形師が養成される。それに伴い、「連立ち」の商品も店頭をにぎわすようになり、いつしか人気は「連立ち」へと傾いていく。時代の潮流をいち早く感じ取った鶴羽さんは、「これからは連立ちの時代」と、小川さんにその製作を勧めた。

押しもおされぬ郷土の代表的民芸品となつた阿波踊り竹人形は、全国各地に広まり、注文が相次いだ。新野町では、しのぎを削る15軒（約50人）の同業者が、1967年（昭和42年）に「徳島竹民芸品製造販売組合」を結成し、初代組合長の小川さんと中川卓也さんが「連立ち」を作り、ほかの組合員は1人立ちの竹人形を出荷した。最盛期には新野町だけで年間約1200万円超の出荷額を誇った。

「小川さんの仕事ぶりは立派でした。わしらが作る人形とは切れ味が違いました。『連立ち』の製作では藤田さんにならい、竹人形の世界に新たな風を吹き込んでくれましたが、小川さんの真骨頂である1人立ちの形状を、『連立ち』に踏襲しなかつたのが残念でした」

そんな思いが、鶴羽さんを新しい作品づくりへと向かわせる。試行錯誤の末、ようやくたどりついたのが、小型の竹人形に袖を付け、鳴り物を充実させた新しい形の「連立ち」だった。これが今に受け継がれる「袖付き竹人形」の原形となる。



出来上がったばかりの女踊り竹人形。袖をつけ、ひざを曲げることで、躍動感をよりリアルに表現している。



鶴羽さんから阿南市に寄贈された45人立ち「袖付き竹人形」。市長公室に飾られている。



小川さんが考案した1人立ち、2人立ち阿波踊り竹人形。大きいもので20cmほどある。

理想の形を求めて

ある日、鶴羽さんは、完成した試作品を組合の商品と一緒にトラックに積み、県外の卸問屋にこっそり持ち込んだ。これが思わぬ事態を招くことになる。事情を知らない卸問屋から「袖付き」の方がいいと催促されたのだ。自信作だったが、あくまで試作品。身勝手な行動であり、組合に迷惑をかけることは想像に難くなかった。

「あの時は、いろんな思いが駆け巡りました。時代の流れを自分でつかみたい、という思いがどんどん膨らんでいったのを覚えています」



妻・和代さんが組み合わせた竹人形を、鶴羽さんが台に立てていくようす。

鶴羽さんは、小川さんに高ぶる胸の内をゆつくりと打ち明けた。

1984年（昭和59年）、鶴羽さんは独立し、妻・和代さん（81歳）と二人三脚で竹人形づくりを始めます。鶴羽さんが腕や足などの部品を作り、和代さんが組み合わせるといって役割分担で完成させていく。「手の格好は一緒でない方が個性的」「左右の袖の角度を変えると躍動感が出る」。理想の形を求めて夫婦で話し合いながら竹人形づくりに打ち込んだ。

「時間を気にせず、夜遅くまで働いたこともありました。夫婦だからこそ2人で二人前以上の仕事をこなせたと思う。けんかもしたけれど、感謝のひと言に尽きます」

一からだった販路も2人で開拓した。徳島民芸社の協力を得て、県外にも出荷するようになった。

工房を訪ねて

竹人形と向き合ってもうすぐ半世紀になる鶴羽さん。竹人形の作り方を教えてもらおうと、工房を訪ねた。

鶴羽さんの工房は家の離れにある。4畳余りの小部屋で日当たりが良く、南西向きの格子窓の向こうには、心むら山の色が広がる。

扉を開けると「シュツ、シュツ」と竹を削る小気味良い音が聞こえてきた。無数のノミ後が残る作業台、その周り



には10センチほどの細い竹が数十本並んでいる。まるで、命を与えられるのを待っているかのようだ。

材料となる五三竹（布袋竹）は、自宅の裏山で調達する。「2、3年ものがつやと弾力があって長持ちする。人間でいう若者や」と、竹藪に目を凝らす。使わないのは葉っぱだけ。伐採時に幹と枝に切り分けて、持ち帰る。

幹は節を残して20センチほどにカットし、釜で30分ほどゆでて油を抜き取り、漂白する。苛性ソーダや過酸化水素水を混ぜるのも、師匠譲りのアイデアだ。その後、過酸化水素水に浸して天日に干す作業を数日間繰り返すと、青かった竹が透明感のある均一の黄白色に仕上がる。

胴、手足、頭に小道具と、部分ごとに作っておいたパーツ群の中からそれぞれを合わせて人形を作る。節の部分に腰や太鼓などに使い、枝は電気ごて

遠方に見えるのが後世山。若かりし頃、山仕事に動んだ思い出の場所である。

挫折と再起

師匠の小川さんが竹に阿波踊りの魂を吹き込んで以来、弟子、孫弟子と多くの竹人形師が誕生した。しかし、活況は長く続かなかつた。オイルショックや平成のバブル経済の崩壊などで出荷量は年々減少。軒を連ねた竹人形師も、高齢化などで次々に廃業していく。時代の荒波にもまれながらも、鶴羽さん夫婦だけは阿波踊り竹人形に自分の世界を投影し続けたが、2000年（平成12年）頃、ついにやめてしまう。和代さんが病を患うと、さらに遠ざかった。

和代さんが療養のために入所していた共同生活介護施設長の陶久晃一さん（56歳・内原町）は、当時の鶴羽さんのようすをこう語る。

「鶴羽さんは将来、自分が和代さんに世話になると人生設計を描いていたのでしよう。和代さんが病床に伏したことで生活のリズムが狂い、精神状態が不安定になっていました。それでも毎日のように施設に通われ、献身的に介護に尽くされました。時が経つにつれ、現実を少しずつ受け入れられるようになってからは、心にゆとりができて、表情も明るくなりました。そんな折、再び竹人形を作る機会が訪れたのです。『わし、ちょっと忙しくなってきたな』。生活の張りを取り戻した鶴羽さんの生き生きとしたあの表情は、今でも忘れ

習いより、慣れる

「習うより、慣れろ。これは鶴羽さんが創作上の大事を弟子たちに示した言葉だ。経験に裏打ちされた、目に見えない技術を継承していくことは一般的に困難であり、創作の積み重ねが必要であることを説いている。

「ものづくりの世界に天井はない。自分に満足したらそこで終わりや。もっといいものを作りたい。これからもそういう気持ちでやっていく」

竹人形づくりを始めた頃、師匠の仕事ぶりを誰よりも近くで見てきた。「一体一体に魂を込めて作ることが何より大切である」ことを深く理解している。師の教えを受け継ぎ、情熱を注ぎこんだ「袖付き竹人形」は、まさに入魂の至芸であり、名工の誇りといえよう。

「阿波踊りが進化しているように、竹人形づくりも歩を止めたらあかん。鳴り物の手に、もう少し躍動感を出すことができた」と、85歳の高齢でなおいっそう細かい竹細工に打ちこむ鶴羽さん。尽きない創作意欲で、一本の竹を際限なく躍らせていく。

「阿波踊りが進化しているように、竹人形づくりも歩を止めたらあかん。鳴り物の手に、もう少し躍動感を出すことができた」と、85歳の高齢でなおいっそう細かい竹細工に打ちこむ鶴羽さん。尽きない創作意欲で、一本の竹を際限なく躍らせていく。

■参考資料
・技工名鑑（四国編） 徳島県物産観光事務所
・徳島の竹製品 徳島の物産 徳島県物産観光事務所



1 下部の節間が不規則に短く詰まっている五三竹 2 のこぎりや根元から伐採する 3 電気ノコギリで幹をカット 4 直径80cmの大釜で30分程度ゆがく 5 油抜きすると透明感のある黄白色に変色 6 溝を彫った板に部品の竹を押しつけて固定し、小刀を当てて竹を削る 7 部分ごとに作り置きしたパーツ群 8 切れ味抜群の小刀、ノミ、はさみ



電気ドリルで台に穴をあけ、人形を立てるようす。部屋の壁には阿波踊りのポスターが貼られている。